

長野県における活動報告

○ 活動の概要			
派遣エキスパート	杉本 伸一（三陸ジオパーク推進協議会上席ジオパーク推進員 （いわて復興応援隊）		
派遣先	長野県危機管理防災課		
派遣日	平成 28 年 6 月 28 日（火）	場所	長野県庁

【活動概要】

○長野県「火山防災のあり方検討会」において、杉本委員による、「火山観光を活かした防災啓発と地域振興」と題した講演を実施していただいた。ビジターセンターの設置に向けて、ビジターセンターの運営やセンター内での啓発内容、火山と共生していく上で地域とのつながり、ジオパークの活動などについて事例をもとに紹介いただいた。（講演時間：杉本委員 30 分、質疑応答 15 分）。

§1 講演概要(エキスパート・杉本委員)

■噴火以前の島原半島の観光

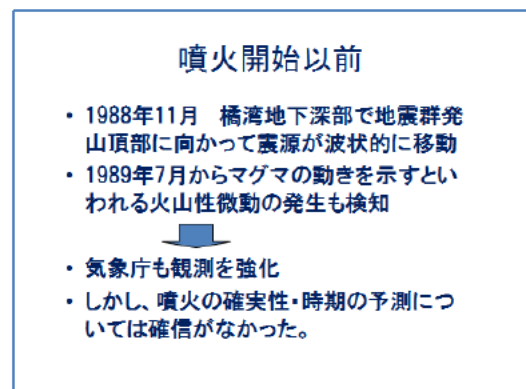
- 日本初の国立公園として、昭和 9 年 3 月 16 日に、雲仙天草国立公園として指定され、外国人の避暑地として、香港や上海から多くの韓国客を集める国際観光地として栄えた。
- その後、昭和 39 年 10 月 30 日に、中九州の観光開発を目的に建設され、別府、湯布院、くじゅう、阿蘇、熊本、雲仙、長崎と多くの観光地を経由する九州横断道路が開通し、何もしなくても、観光客が来た時代だった。



■平成の噴火

【噴火開始以前】

- 1988 年 11 月、雲仙岳の西側の橘湾の地下深部で地震が発生し始め、翌 89 年 7 月からは震源が山頂部に向かって移動してきて、火山性微動が検知された。
- 気象庁も観測強化を行ったものの、噴火するか、確実性がなく、時期の予測については確信がなかった。



【知らされなかった噴火予知】

- 長崎県島原地区幹部研修会で、噴火の可能性を指摘されていたが、地域住民の混乱や観光への悪影響を考慮し、外部への漏洩無きように強く要請されていた。そのため、島原市には伝えられておらず、町長は「噴火は寝耳に水だった」と発言。幸い噴火開始は未明だったため、死傷者は出なかった。なお、小浜町役場（現雲仙市）には内密に事前通知していた。

【噴火直後】

- 1990年11月に地獄跡火口・九十九島火口から噴煙が上がった。198年ぶりの噴火であったため、市民の中には山火事として通報していた者もいた。現場を確認し、噴火と認識した後は、小浜町、長崎県、環境庁、小浜警察署、雲仙観光協会で普賢岳火山活動警戒連絡会議を設け、観光地である仁田峠（観光地に登る道路）に通じる有料道路（仁田峠循環道）の全面通行禁止と仁田峠以上の入山の禁止を決定した。
- 翌年2月12日に、別の火口から噴火が始まり、火山灰を噴出した。
- 噴火による被害は、死者（行方不明者を含む）44名、家屋倒壊2511棟、被害総額2300億円となった。

■噴火後の観光

【島原市の観光客】

- 噴火後の観光客は、島原半島全体に大きな影響し、噴火前の約半数、宿泊客も半数程度となった。
- 特に修学旅行の数は、少しでも危険性があれば敬遠されることから、激減した。
- これら、観光客数の低下により、経済的低迷が顕著となった。

知らされなかった噴火予知情報

九州大学太田教授の話

- 大きな報道による**住民の混乱や観光への悪影響**を考慮し、緊急観測強化や噴火の可能性について情報を伏せていた。
- 長崎県島原地区幹部研修会で噴火の可能性を指摘、小浜町役場には内密に事前通知したが外部への漏洩無きよう強く要請

島原市長「噴火は寝耳に水だった

噴火開始は未明で、幸い死傷者は出なかった

噴火開始

1990年11月17日地獄跡火口・九十九島火口から噴火

- ①仁田峠に通じる自動車道の仁田峠循環道の全面通行禁止
- ②登山者に仁田峠以上の入山禁止



噴火による被害

- 死亡者（行方不明3名を含む） 44人
- 負傷者 12人
- 家屋被害 2,511棟
 - 土石流による被害 1,692棟
 - 火砕流による被害 808棟
 - 噴石による被害 11棟
- 被害総額 2,300億円

13

島原市の観光客

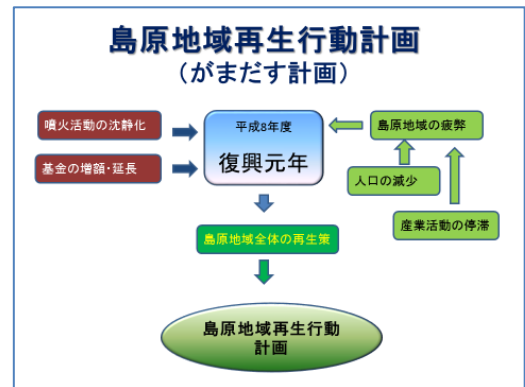
入込客数及び宿泊客数 単位千人



14

【島原市のがまだす計画】

- 「がまだす」とは、島原の方言で「頑張る」という意味である。
- 島原市は、平成5年3月に、「生活再建」「防災都市づくり」「地域の活性化」の3つを柱とした復興計画を策定した。
- その後、復興の歩みを続け、平成8年を復興元年とし、噴火による人口の減少や産業活動の停滞により、疲弊している島原地域全体の再生策として、島原地域再生行動計画、通称「がまだす計画」が策定された。
- これにより、火山との共生を目指す地域づくりが進められることとなった。



■雲仙災害記念館

- 雲仙災害記念館は、愛称「がまだすドーム」と呼ばれ、2002年7月にオープンした。
- がまだすドームは、「平成の雲仙普賢岳噴火災害の脅威や教訓を風化させることなく後世へ伝承し、自然災害に対する防災意識を後世へ継承する。」「火山学習（観光）の中核施設として観光客の集客に努め、地域の活性化を図る。」「災害時に全国からいただいたあたたかいご支援への感謝の気持ちを表す。」を趣旨として設置された。
- がまだすドームには、マグマの動きを再現した「マグマゲート」、平成の噴火による火砕流や土石流を、スクリーンに映し出される火砕流や土石流の映像と合わせて震動する床、吹き上がる熱風により、疑似体験できる「平成大噴火シアター」などがある。



■平成新山フィールドミュージアム構想

- 島原半島には、ジオツアーの中核施設となる、雲仙お山の情報館や雲仙岳災害記念館のほかにも、自然や災害をテーマにした、様々な資料館があり、来訪者の興味を引

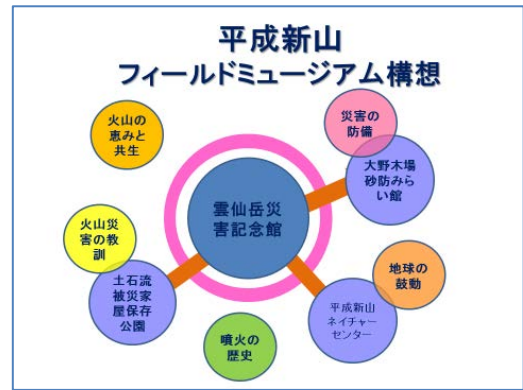


ている。

- また、各施設はお互いに連携し情報交換をしながら、ジオツアーや、火山・自然教室の開催などに、取り組んでいる。
- これからの一連の施設が整備されると、長崎県は2002年度から2004年度にかけて、これらの施設のネットワーク化と役割分担を図るために、施設の関係者および関係機関からなる平成新山フィールドミュージアム推進会議を設置した。
- ここで平成新山フィールドミュージアム構想が策定され、統一案内板の設置、ガイドブックや案内マップ、リーフレットの作成、案内をするボランティアガイド養成事業が実施された。雲仙岳災害記念館をコア・ミュージアムとして位置づけている。
- これまでの島原の観光客は、通過型で滞在時間は2時間から半日程度である。これらを活用して、滞在時間を長くし宿泊に結びつけることや修学旅行生の学習体験に活用を期待したものである。
- この平成新山フィールドミュージアム構想は、その後島原半島ジオパークの取組みの中に組み込まれ、より具体的な計画として、島原半島3市全体の計画となっている。ジオパークの取組みによって、雲仙災害記念館に学芸員が配置され、火山学習資源の掘り起こし・保全などの機能が備わった。

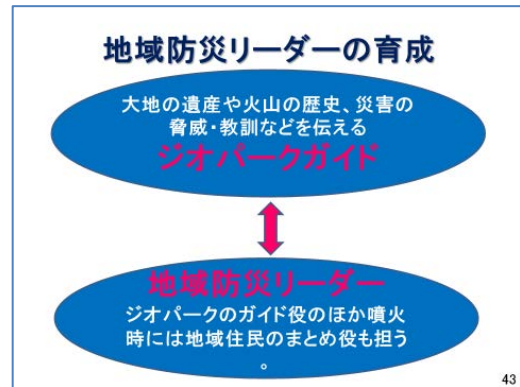
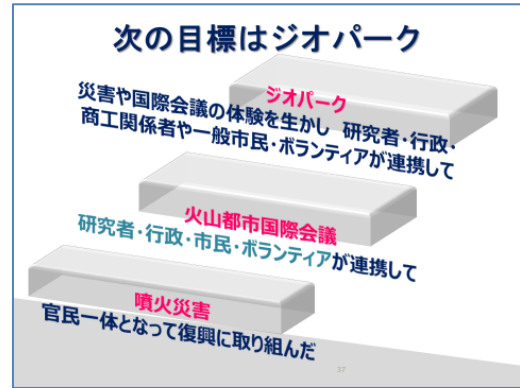
■ジオパーク

- 島原市では、平成16年に世界で初めて成功した火道掘削による地下マグマの直接採集など、世界最先端の火山研究などでも雲仙普賢岳は注目を集めていた。
- このような雲仙普賢岳での災害とそれに立ち向かい復興に取り組んだ様子や教訓を世界に情報発信するため、平成19年に



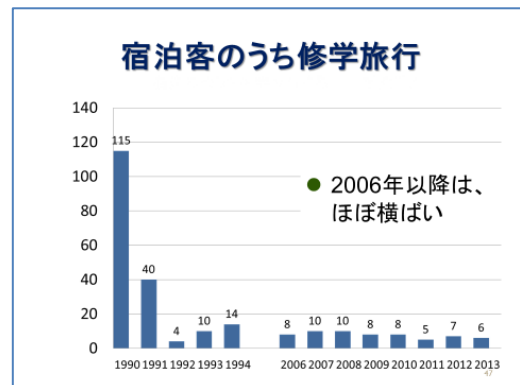
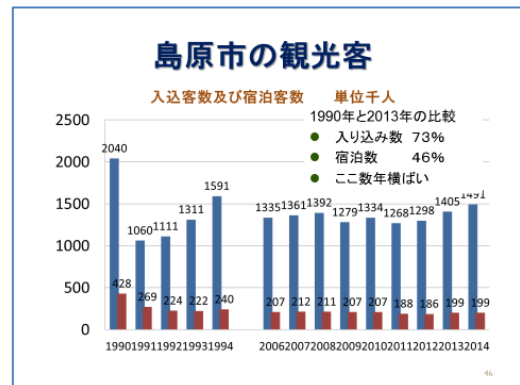
「火山都市国際会議」を開催した。

- その後、災害や国際会議の体験を生かして、研究者・行政・商工会や一般住民等が連携して、ジオパークを目指すこととした。
- ジオパークとは、地球の歴史を学ぶことができる自然の中の公園である。
- ジオパークは、ガイドを育成し、大地の遺産や火山の歴史、災害の脅威・教訓などを伝えるとともに、噴火時には地域住民のまとめ役も担う地域防災リーダーを育てることもできる。



■現状と課題

- 災害から 25 年が経ち、住民も行政も災害を知らない人が多くなっている。
- がまだすドームも開館から 15 年が経ち、災害記念館の入館者が減少の一途となっている。また、経年劣化等に伴う施設・展示の修繕改修費用が定期的に発生している。
- 噴火災害の脅威・伝承というテーマが色あせてきているという課題も出てきている。
- 観光客数は、入込数は噴火以前に比べ 73% まで回復したが、宿泊者数は 46% と回復しておらず、ここ数年は横ばいが続いている。また、修学旅行の数は戻っておらず、ここ数年は横ばいとなっている。



<活動の様子>

